

# ブルゴーニュの農家

## ジャン・コラルド

ブルゴーニュには自然の境界がなく、現在地理学上定められているものは純粋に行政的なもので、本来ブルゴーニュのものとは見なすことができる領土の境界線を判別するのはとても難しいことです。歴史的には、1482年にフランス王国に併合されるまでブルゴーニュの境界は拡大し続けました。

今日、ほかの地方が地元の方言に関わる表現や教育の権利を主張しているように、言語という基準を拠り所とすることもできません。往來の激しい土地であるブルゴーニュは、外国とあまたの接触があったため、言語および文化上の特徴を維持することができませんでした。ですから、そういった特徴を見いだそうとするなら、人間の性格そのものに目を向けなければならないでしょう。現に、歌の中で「ブルゴーニュ人であることを誇りに思う」( \* と高らかに歌い上げられています。だからといって、こういった性格は民族的な基準に根ざしているわけではありません。原住民の起源は、侵略、戦争、外国からもたらされたさまざまな要因によっていくぶん乱されたからです。

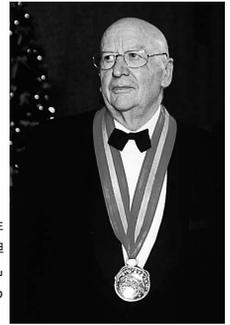
住居がもつばら木造であった時代の建物は、現在ほとんどその痕跡を残していません。石の建物が建てられるようになったのは、中央ヨーロッパからやってきたケルト人による長い占領の後の、ローマの占領期からのことです。その遺跡は今日でも見受けられますし、こういった建造物がブルゴーニュの村々の手本となったのです。村(ヴィラージュ)という名前自体は、野原のまん中に建てられた家を意味するラテン語のVILLAからきています。これは、保養やレジャーの場であるセカンドハウスと見なされる現代の別荘よりも、農家の範疇に入るものです。

このローマ式別荘のまわりでは、木の文明を守り続けるガリア人が、木の幹で作られたわらぶき屋根の小屋の中で暮らしていました。19世紀の末まで、こういった家が貧しい人々の生活の場であることには変わりありませんでした。このわらぶきの家は、厳しい暑さや寒さを防ぐ材料でできているので比較的快適ではありましたが、残念ながら、木とわらは火災などを起こす危険を常にはらんでいました。暖炉や照明用の火には絶えず気を遣っていたにもかかわらず、火花や隣人の不注意、ときには雷が原因で、あばら屋がたいまつのように燃え上がることがよくありました。

そこで、家長たちはひとたび手段を手にするや、当面の安全だけ

Jean Collardot / ジャン・コラルド

1925年、フランスのニュー=サン=ジョルジュ市生まれ。69年から95年まで同市の文化・都市計画担当助役を務め、現在「ブルゴーニュワインの騎士団」長老。外国語、歴史、宗教哲学、テッサン、絵画について造詣が深く、7カ国語を解する。



ではなく、遺産として子供たちに譲り渡すことができる石でできた住居をこぞって建てるようになったのです。ディジョンからコート・シャロネーズ、さらにはそこからボージョレ山地まで広がるブドウの丘の栽培者たちも当然のことながら、ブドウのみならず石灰石を授けてくださったことを創造主に感謝しました。地面から露出した石灰石が、悪天候をもとめせず、時の試練にも耐える堅牢な住居やワイン地下蔵、経営用建物に使用されたのです。

定住の場所はすぐに決められました。初めからローマ人居住者の別荘のまわりを探していましたし、また水源のあるところを定住の地と決めていたため、おのずから泉の近くや川べり、井戸の近辺が候補となりました。丘陵地帯の地質学的構造は、断層が点在する石灰岩からなっています。小川の水はこれらの層の中にいったん身を隠し、思いもかけない場所に再び姿を現して人々の定住の地となりました。ですから、ボージョレやプレスといったほかの地域ではもっと点在しているのに比べ、私たちの丘陵地帯の村の家々は一箇所にまとまっているのです。

あらゆるブルゴーニュの建造物の主要部をなす「地下蔵」には、ワイン樽を保存し、ワインに熟成のための最適な温度を与えるという機能があります。加えて、その冷気によって、食料品や野菜、冬に屠殺された豚の肉片を塩漬けた容器などを夏場でも十分保管してくれます。

節約の観念から、当時の建築家は地下蔵の外形および丸天井が忠実にかたどられるように、地面に直接溝を掘りました。次に、曲線に沿って、丸天井の要石の部分までその溝の中に石が集められました。要石というのは、ほかの石が受ける応力を支える最後の石のことで、建造物の堅牢度を左右するものです。あとは、自然の型枠の役目を果たしていた土を掻き出し、新たに作られた空間を利用するだけです。

それから、居住用の部屋の建設に取りかかりました。居住用の部屋は、一般に、食物を焼いたり冬場に部屋を暖めるための火を絶やさないと主目的とした暖炉付きの大広間からなります。戸口が中庭か通りに直接通じているこの主室のまわりに、寝室に使われる別の部屋が1つか2つ作られました。台所専用の部屋はなく、食物は暖炉の火床で焼かれ、食器洗いは部屋の隅の、外部に直接通じ



る配水管がついた石をくり抜いた流して行われました。

生活のためのこれらの部屋の隣には、収穫時に発酵室の役目を果たしたり、作業用具をしまったりするための貯蔵室がありました。多くの場合、居住用の部屋は貯蔵室の上にあります。頻繁に発生した洪水や夏の時期の嵐から部屋を守るためです。部屋へは、ブルゴーニュのブドウ栽培者の住居の特徴である石の階段をつたって上っていきます。裕福な地主の家には、パン焼き用のかまどを備えた部屋があり、そうした部屋をもたない人々のためには、必要なまきをもってきて自分のパンを焼く共同かまどがありました。

家の裏手には、干し草やわら用の屋根裏付納屋や、牛小屋、馬小屋といった経営用の建物があり、さらに鶏小屋、そして豚を太らせるための小屋もありました。豚は1月に屠殺され、その肉は塩漬け用の容器に入れられて、一年じゅう食べられるように保存されるのです。鳩小屋については、かつて領主に与えられた特権であり、たいていは城館の翼棟に備えつけられました。1789年の大革命によって特権が廃止された後、地主ならだれでも鳩小屋を建てられるようになりました。

賢者でもあったブドウ栽培者は、多少の金があっても伝統的に富をひけらかすことを好みませんでした。厳しい耐乏生活を送っていたブドウ栽培者は、家族の生活に不可欠なものはほとんどすべて自分たちの手で生産していました。外で手に入れなければならないものは金が必要です。財布を管理している一家の主婦は、出費の正当性をようやく確認した後、しぶしぶ紐をゆるめるのが常でした。

しかし、小麦をひき、粉を作るためにはどうしても製粉所に頼らざるを得ませんでした。製粉業者はとかく評判が悪く、預かった小麦粉を一部着服し、貧しい農民の背後で財をなしたとしてよく非難されました。製粉所は高所に設けられたときは風から、川に設けられたときにはその流れからエネルギーを得て機能しました。風車は穀物の製粉専用であり、水車はクルミの圧搾による製油、製紙、製材、果ては石切といったほかの活動にエネルギーを供給することができました。

水車を回すために、上流に水をせき止めるダムが作られました。そこから水は導水路と呼ばれる運河に流れ込み、高低差から生まれる滝となって水受け板に落ちて車を回すのです。こうした車の回転によって白やのこぎりの仕掛けが駆動するわけです。水車の建設

にはインフラ工事を行うための大きな資金が必要だったため、機械装置の青写真を作るのは、資金力のある地元の領主や大修道院長、裕福な地主の仕事でした。

川は機械的なエネルギーを供給するだけでなく、家畜用の水飲み場を満たしたり、女性たちが洗濯のために押しにかけてくる共同洗濯場への給水にも役立ちました。洗濯物は洗濯釜と呼ばれる大きなたらいにあらかじめ漬け込まれ、その中に木灰が加えられ泡立てられます。次に、このたらいは洗濯場に運ばれ、洗濯物はこすられ、木のへらで叩かれ、すすがれます。しかし、このつらい仕事は主婦たちに歓迎されました。家事や野良仕事にしばられて抱く孤立感から解放されるよい機会だったからです。ここは、その真偽のいかんにかかわらず、外部のニュースを知る場所であり、軽口のつれづれに村の娘たちのうわさ話に花が咲く場所なのです。不運にして川に負めかれていない村では、洗濯場は泉がわき出るところに設けられたり、今では各市町村に通じている導水路の原型である集水施設によって、水が村まで引いてこられました。

今日ブルゴーニュを訪れる人には、通りは往々にして狭いうえ、正門の扉口を通しても邸宅がかいま見えないほどの高い壁が連なっているため、ブルゴーニュの村はかなり閉鎖的なイメージを与えます。かつて領主が城館の壁を築いたように、ブルゴーニュの農民は安逸を得ながら身を守ろうとしてきたのです。

しかし防衛など実にもむないことです。今日私たちが脅かしているのは、井戸までいって汲み上げなければならなかった貴重な水を無駄に使わない、川のエネルギーが環境を汚すことなく再生される、といったあの質素な生活を放棄してしまったこと自体にあるからです。

(\*) ブルゴーニュのテーマソングともいえる『ブルゴーニュの陽気者』(別名:ブルゴーニュ賛歌)の中の一節

**ブルゴーニュへ、ようこそ**

中世のほかに思いついていないブルゴーニュはいっしょに暮らせんか、  
 極上の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、  
 中世の味あふれる街並み、美しく広がる大地や、小さな村々、  
 豊かな生命力がはたの心(心)を感じさせる地方、  
 それがブルゴーニュです。

お問い合わせ  
 (株) 庄多商業事務局 担当: 岩沢  
 Tel. 03 3582 5087

